

Title	15・16世紀オスマン朝におけるユダヤ教徒宮廷侍医
Sub Title	Jewish physicians at the Ottoman court in the 15th and 16th centuries
Author	宮武, 士郎(Miyatake, Shiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	2000
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.69, No.3/4 (2000. 5) ,p.155(487)- 169(501)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20000500-0155">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20000500-0155</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 15・16世紀オスマン朝におけるユダヤ教徒宮廷侍医

宮 武 志 郎

はじめに

筆者はこれまで16世紀オスマン朝において、経済的のみならず、政治面でも大きな影響力を持っていたナスイ一族について調査してきた。ナスイ一族は、イベリア半島においてキリスト教公権力による異端審問の迫害から逃れるために、一時的、あるいは恒久的にユダヤ教からキリスト教に改宗したコンヴェルソ、新キリスト教徒、あるいはマラーノと呼ばれた人々に属していた。彼らがオスマン朝の首都イスタンブルに定住するまでに、ヨーロッパ各地で商業活動を行っている過程で、各地の商業拠点を中心に、独自の情報ネットワーク形成していたことは明白である。<sup>(1)</sup>このネットワークの担い手となっていたのが、ナスイ一族の親族、マラーノ、ユダヤ教徒、そ

して各地のラビであった。筆者はこの調査の過程で、オスマン朝宮廷内において活動している数多くのユダヤ教徒宮廷侍医に気付いた。本稿では、ナスイ一族と深い関係のあったと考えられるユダヤ教徒の医師が維持していたであろう情報ネットワークの存在を明らかにしていきたい。

I ナスイ一族とモーゼス・ハモン

マラーノであったナスイ一族は、リスボンとアントワープを中心に、広範な商業活動を営み、巨大な資産を築いた。しかし、ポルトガル政府による異端審問強化のために、一五三六年リスボンを離れ、アントワープに拠点を移した。アントワープにおいても、ナスイ一族の巨大な資産を目当てに、当局の圧力に会い10年後の一五四

六年頃にヴェネツィアに再び移住した。しかしながら、このヴェネツィアも安住の地ではなかった。アントワープと同じくナスィ一族の資産の没収を目的に、ヴェネツィアの十人会はナスィ一族に圧力をかけたため、ナスィ一族はフェッラーラを経て、最終的には一五五三年頃にオスマン朝の首都イスタンブルに到着した。ナスィ一族のヨーロッパ各地を舞台にした大まかな移動の経緯は以上の通りである。<sup>(2)</sup>ところが、ナスィ一族が安住の地として選んだイスタンブル到着する時点で、注目せねばならない事実が存在する。それは、オスマン朝の公文書であるミュヒンメ・デフテリの中に、ナスィ一族がイスタンブルに至る以前の<sup>(3)</sup>一五五二年頃に、スレイマン大帝からヴェネツィアのドージェに対し、ナスィ一族が安全にヴェネツィアから出国できるように要請した親書が残っていることである。しかもその内容は、ヴェネツィアにいるユダヤ教徒の未亡人とその妹や娘たち、即ち、ナスィ一族の当主であるグラツィアとその親族が、スレイマン大帝の宮廷侍医であるユダヤ教徒のモーゼス・ハモン<sup>(3)</sup>の親戚であるが故に、便宜を図るようというものである。そして、それは当時のフランスの史料によっても確認されている。もちろん、ナスィ一族とモーゼス・

ハモンは親戚ではない。では、モーゼス・ハモンというユダヤ教徒の宮廷侍医は一体どのような人物であったのだろうか。彼はイベリア半島で医師であったジョセフ・ハモンの息子であった。ジョセフ・ハモンは一四九二年のスペインによるユダヤ教徒追放令で、一四九三年頃にオスマン朝に移住し、時のスルタン、バヤズィット2世の宮廷侍医になった人物であり、次のスルタンのセリム1世にも仕え、セリム1世のマムルーク朝遠征にも同行していた。息子のモーゼスも一五三〇年代にはスレイマン大帝の下で宮廷侍医となり、かなりの高給を得ていたことが、オスマン朝の帳簿に載っている。<sup>(4)</sup>では、何故、イスラーム国家であるオスマン朝の宮廷で、ユダヤ教徒の医師が活躍し得たのであろうか。ここで、オスマン朝のメフメット2世以降の状況を振り返ってみることにする。コンスタンティノープルを攻略したメフメット2世が極めて進取に富んだ性格で、ヨーロッパを含む外来の文化を積極的に取り入れたことは有名である。例えば、イタリアの画家であるジェンティール・ベツリーニ<sup>(5)</sup>をオスマン朝宮廷に迎え入れたことはその好例であろう。同様に、高度な技術と知識を持つ内科医も積極的に採用した。その中でも、イスラーム世界の外から招来された

ヤークブ・パシヤが挙げられよう。彼はナポリ近郊のガエタ出身のユダヤ教徒医師で、メフメット2世に宮廷侍医として採用された。そして、自らの知識と技能を駆使して次第に頭角を現し、宮廷内で大きな影響力を持った人物であったとされる<sup>(6)</sup>。さらに、一四九二年スペインで発せられたユダヤ教徒追放令によって、オスマン朝では数多くのユダヤ教徒医師が宮廷に出現し始めた。もちろん、宮廷侍医長であるヘキーム・バシユ (Hekim Basi) の地位はムスリムによって占められていたが、16世紀になると給与台帳の中に必ずユダヤ教徒名の宮廷侍医の存在が複数確認できる<sup>(7)</sup>。これは古代ギリシアからの医学を受け継いで発展したイスラーム医学の知識、そしてイスラーム医学をルネサンス期からさらに発展させたヨーロッパ医学の知識を学んだユダヤ教徒の医師の重要性を、オスマン朝の諸スルタンが見いだしたからに他ならない。もちろん、オスマン朝は医師だけでなく、様々な分野の技術や知識を持ったユダヤ教徒を厚遇したことは周知の事実である。このような状況下にあつて、ハモン一族はオスマン朝に移住したのである。

さて、モーゼス・ハモンに関する研究は、すでにヘブライ大学の故ウリエル・ヘイド教授によって詳細になさ

れている<sup>(8)</sup>。その研究によれば、一五四〇年代から50年代初頭にかけて、モーゼス・ハモンはオスマン朝宮廷においても、大きな権力を掌握していたとされる。また、イスタンプルのユダヤ教徒コミュニティにおいて、一五二六六年に著名なラビであるエリヤフ・ミズラヒが死去すると、イベリア半島からのスファラド系避難民で増大しつつあつたユダヤ教徒を統率する精神的リーダーは見られなくなつていた<sup>(9)</sup>。また、世俗的リーダーとしてシエアルティエルという人物が活躍していた時期も一五三〇年代頃には史料の上から消え去つていく<sup>(10)</sup>。言い換えれば、イスタンプルのユダヤ教徒コミュニティ大きな権力を持ったリーダーは存在しなかつたことを意味するものである。そのような状況下にあつて、モーゼス・ハモンはオスマン朝宮廷での高い評価を利用して、コミュニティ内での指導力を獲得していったようである。その証拠に一五四〇年代、サロニカのユダヤ教徒コミュニティ内<sup>(11)</sup>で、対立が起こつたときに彼は仲介に入り、オスマン朝当局の官憲が事態収拾のために派遣されるように取り計らつていく。そしてサロニカのコミュニティ内での混乱の原因となつた徴税請負人を追放している。このように、オスマン朝宮廷内とユダヤ教徒コミュニティ

テイー内で、大きな権力を持つようになったモーゼス・ハモンに対し、ナスイ一族はどのようにに接触を図り、スレイマン大帝の親書を発送させることに成功したのであるか。

II-1 両者の接点：エージェント

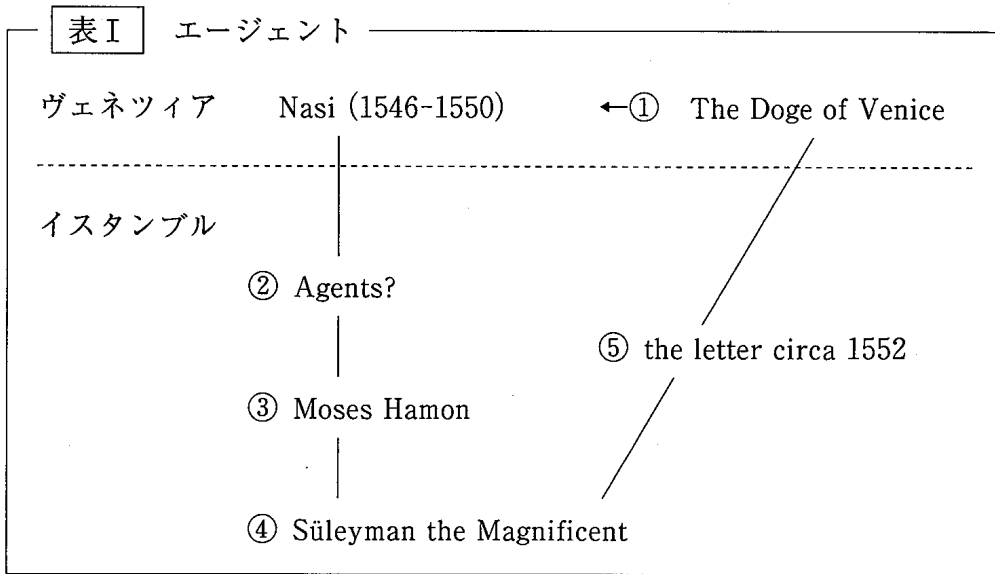
ナスイ一族がモーゼス・ハモンに接近した手段としては、次の三つが可能性として挙げられよう。第一にナスイ一族のエージェント、第二に各地のラビ、第三にユダヤ教徒の医師である、第一のナスイ一族のエージェントとは、既に発表者が調査してきたものを要約すると以下のようになる。<sup>(12)</sup> ナスイ一族は、リスボンにいたときからすでにアントワープを最大の商業拠点とし、ヴェネツィアやアンコーナ、ロンドンなどヨーロッパ各地に支店を設け、さらにはポーランド等の東ヨーロッパ、サロニカ、イスタンブル等のオスマン朝の都市にも自らのエージェントを派遣し、商業活動を行っていた。もちろんそれらの地では、ナスイ一族は商業活動を有利に進めるために、各地の当局だけでなく、ユダヤ教徒コミュニティとの接触も図っていた。これはそのユダヤ教徒コミュニティ内部での有力者との接触を意味するもので

あり、一五三〇年代から次第に大きな権力を持ち始めていたイスタンブルのモーゼス・ハモンとの関係を構築していった可能性も高いと考えられる。ナスイ一族のエージェントがモーゼス・ハモンにスレイマン大帝のヴェネツィア宛の親書作成を依頼した史料は存在していない。しかし、少なくともナスイ一族がヴェネツィアを出発する直前の一五四九年から一五五〇年の間には、モーゼス・ハモンがナスイ一族の存在を知っていたことは事実である。このことをまとめると表1の様になる。即ち、

①一五四六年から一五五〇年までヴェネツィアに滞在していたナスイ一族に対し、ヴェネツィアの十人会が財産の差し押さえに出ようとしたため、②ナスイ一族はエージェントを通じ、③イスタンブルにいたモーゼス・ハモンに依頼し、④スレイマン大帝を動かし、⑤一五五二年頃に親書をヴェネツィアのドージェに送って圧力をかけたのであった。

II-2 両者の接点：ラビ

次に、第二の各地のラビについて考察してみることにする。ユダヤ教徒は紀元前からのディアスポラのために、西アジア、ヨーロッパに数多くのコミュニティを形成



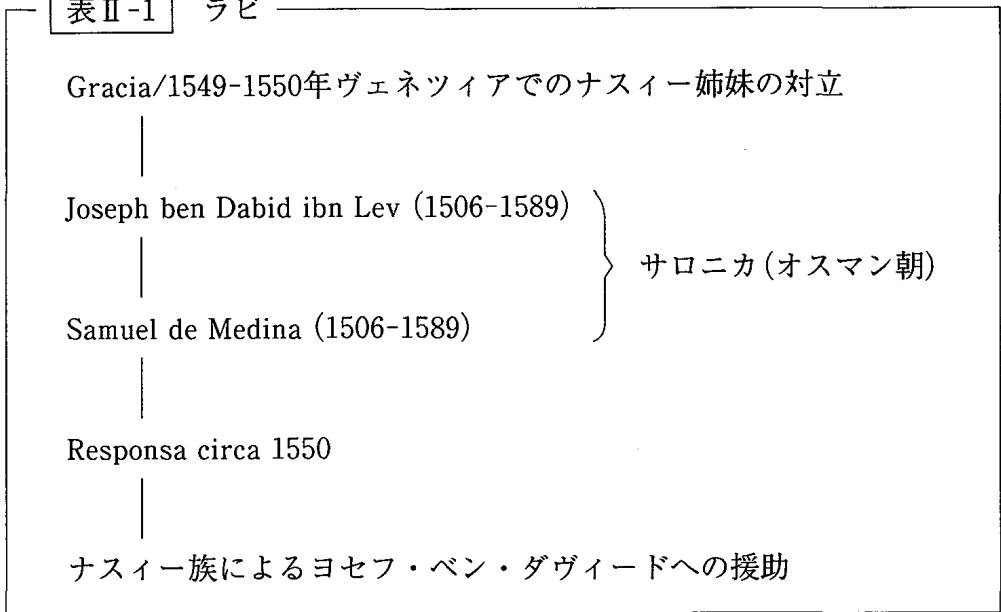
してきた。それらのコミュニティーには主要なラビが存在し、宗教的指導者として精神面での中心となっていた。そしてそれらのラビの中には、教義研究に優れた者も数

多く出現しており、そのラビの指導を仰ぐ他コミュニティーのラビやユダヤ教徒も多くいた。彼らは自分たちが直面している問題に対する解決のためアドバイスを求め、それに対し著名なラビがユダヤ教教義に基づいて解決法を書簡に託し、発送するということが行われていた。ム

スリムの間で行われていたフェトワ (fatwa) に近似しているこのシステムをレスポンス (Responsa)、ヘブライ語では Sherot u Teshuvot (質問と回答) と呼ばれていた。<sup>(13)</sup> このレスポンスは、もちろん一つのユダヤ教徒コミュニティーの範囲を超え、国外にまで及んでおり、ラビによるこうしたネットワークは西ヨーロッパからアフリカ、中近東にまで広がるものであった。ナスイ一族によって、ラビのネットワークが利用されていた事実も存在する。ナスイ一族がヴェネツィアから離れる前の一五四九年から一五五〇年にかけて、ナスイ一族の当主であるグラツィアとその妹が、一族の財産相続をめぐる対立、妹側がヴェネツィアで裁判を起こした。その際に、ヴェネツィア当局はこのトラブルを利用し、ナスイ一族の財産の没収を企図した。グラツィアはこの危機に2人のラビを利用し、自らの正当性を主張した後、ヴェネツィアを離れている。<sup>(14)</sup> 表II-1はこの後の状況をまとめ

たものである。グラツィアはヴェネツィア当局の圧力に対抗し、ヴェネツィアを離れ、さらにマラーノであることをやめ、ユダヤ教に戻ることを前提として、サロニカの著名なラビで

表Ⅱ-1 ラビ



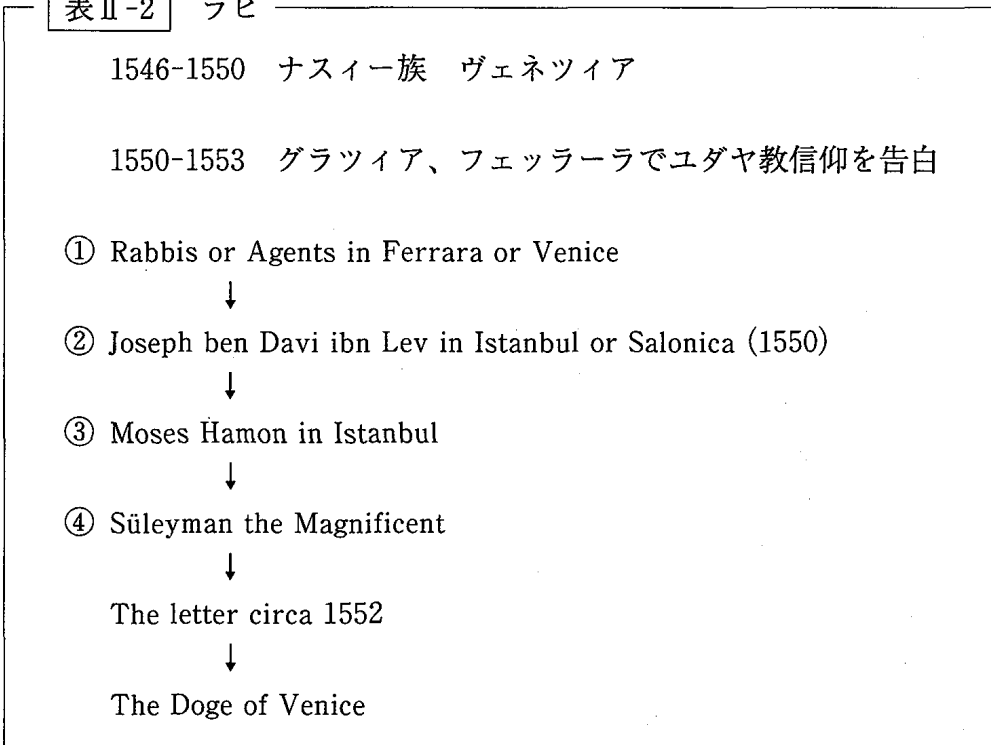
ド・イブン・レヴというラビによって書かれ、メデイナの名で発せられたことが明らかになっている<sup>(15)</sup>。当時、スファラド系ユダヤ教徒間では、このサミュエル・デ・メ

あるサミュエル・デ・メデイナから自らの財産保持の正当性を認めるレスポンスを獲得している。しかしながら、このレスポンスは実際は同じサロニカにいたと考えられるジョセフ・ベン・

デイナに対する信頼感は絶大なものがあり、彼の名で発せられたレスポンスは絶対的なものとされていた。グラツィアはこのことを承知の上で、メデイナより格下ながらより影響力を行使しやすいジョセフ・ベン・ダヴィードに働きかけたのであろう。そしてその一五五〇年にジョセフ・ベン・ダヴィードはサロニカからイスタンブルに移住している。ナスイー族も一五五三年頃にイスタンブルに移住した後、このジョセフ・ベン・ダヴィードをナスイー族が寄進して設立したシナゴグである *D.ª la Señora* の付属のイエシヴァ（ユダヤ教神学校）の教師になっている。換言すれば、ナスイー族は自分たちの危機を救うことに尽力したジョセフ・ベン・ダヴィードに報いるために、彼のパトロンとなったのであろう。そしてナスイー族とラビの関係は、一五五二年頃に発送されたスレイマン大帝の親書の問題を解くキーワードとなる。次の表Ⅱ-2ではその状況を示した。

ヴェネツィアでの危機を避けるため、一族の当主グラツィアは一五五〇年にフェツラーラに移住、正式にユダヤ教徒であることを宣言し、マラーノであること、そしてキリスト教徒名を放棄した。フェツラーラは支配者の

表Ⅱ-2 ラビ



エルコレーレ2世がユダヤ教徒に寛大な政策を実施しており、多くのアシケナーズ系やスファラド系ユダヤ教徒が居住していた。ナスイー族は一五五〇年頃に、①ヴェ

ネツィアからフェツラーラのエージェントあるいはラビを通じ、②サロニカ、あるいはイスタンブルにいたジョセフ・ベン・ダヴィードに働きかけて、③宮廷の中で絶頂期にあったモーゼス・ハモンを動かし、④スレイマン大帝のヴェネツィアへの親書が送られることになったと推定できる。グラツィアが既にヴェネツィアを出て、フェツラーラにいたとしても、妹親子がまだヴェネツィアにいた可能性も高く、あるいはフェツラーラからイスタンブルへの航海がヴェネツィア当局によって妨害される可能性を考えると、スレイマン大帝の親書が一五五二年頃に送られたとしても、その効果は大きなものであったと考えられる。以上がラビを利用してのネットワークの可能性である。

### Ⅱ-3 両者の接点：医師

最後に、ユダヤ教徒の医師やマラーノの医師について考察してみたい。モーゼス・ハモンとナスイー族を結びつけるルートがエージェント、ラビのネットワークに基づいていることは前述した。しかし、このルート以外に、もう一つのルートが存在している。ポルトガル系マラー



ノであるアマトウス・ルスイタヌス(一五二一—一五六八)という人物である。<sup>(16)</sup>彼はスペインのサラマンカ大学で医学を学び、ポルトガルで医師として活躍していたが、ポルトガルでのマラーノに対する異端審問が激しくなる兆候が見えると、一五三三年にアントワープに移住、医学の道を究めながらも、その後ヨーロッパ各地を転々とし、最終的にはオスマン朝のサロニカに定住した人物である。彼はマラーノであるため、キリスト教徒名ホアン・ロドリゲス・デ・カステロを持っていたが、ここではルスイタヌスと統一して呼ぶことにする。彼はアントワープに滞在していた間に、紀元1世紀のギリシアの薬学者・医学者として有名なディオスコリデスの著作で、15世紀まで権威的な医学書とされる“*De Materia Medica*”の注解書である“*Index Dioscorides (Materia Medica)*”を公刊している。その後一五四九年から一五六一年まで、多数の症例と治療、そしてその結果を記録した“*Centuria*”を執筆し始め、全部で7巻を刊行した。また、一五五三年には“*In Dioscoridis emanationes*”を執筆、ディオスコリデスの研究を終えたが、この著作はヴェネツィアで刊行された後、リヨンを含め多くの地で重版されている。また、彼の医学者、薬学者としての豊富な知識と経験は、

ポーランドのジギスムント2世アウグストによって、宮廷侍医として招致の誘いもあった程である。また、一五五〇年にはローマ教皇ユリウス3世の妹の治療に成功したこと、度々ローマを訪れたとされている。しかし、ルスイタヌスのこのような輝かしい医師としての業績にもかかわらず、マラーノであるが故に、彼は常に不安定な生活を余儀なくされていた。表Ⅲ—1では、ルスイタヌスとナスイ一族の所在とその時期を示した。異端審問を逃れてからのルスイタヌスは、まさに流浪の医師であった。特に、アンコーナでは一五五六年のアンコーナ事件に遭遇したと考えられ、危うく難を逃れている。この事件は、それまで親ユダヤ、親マラーノ政策を続けてきた教皇とは異なり、ユダヤ教徒、特にマラーノを敵視する枢機卿ジョヴァンニ・ピエトロ・カラツファがパウルスIV世として教皇に就任すると、マラーノを捕らえ、異端審問にかけて、ユダヤ教信仰を告白した者24名を焚刑に処したというものである。このとき、多くのマラーノがウルビーノ公グウイドバルド2世支配下のペーザロへ避難したが、ルスイタヌスも同様にペーザロへ逃れている。ところで、このアンコーナ事件の犠牲者の中にナスイ一族のエージェントが存在していたため、ナスイ一

表Ⅲ-1 医者

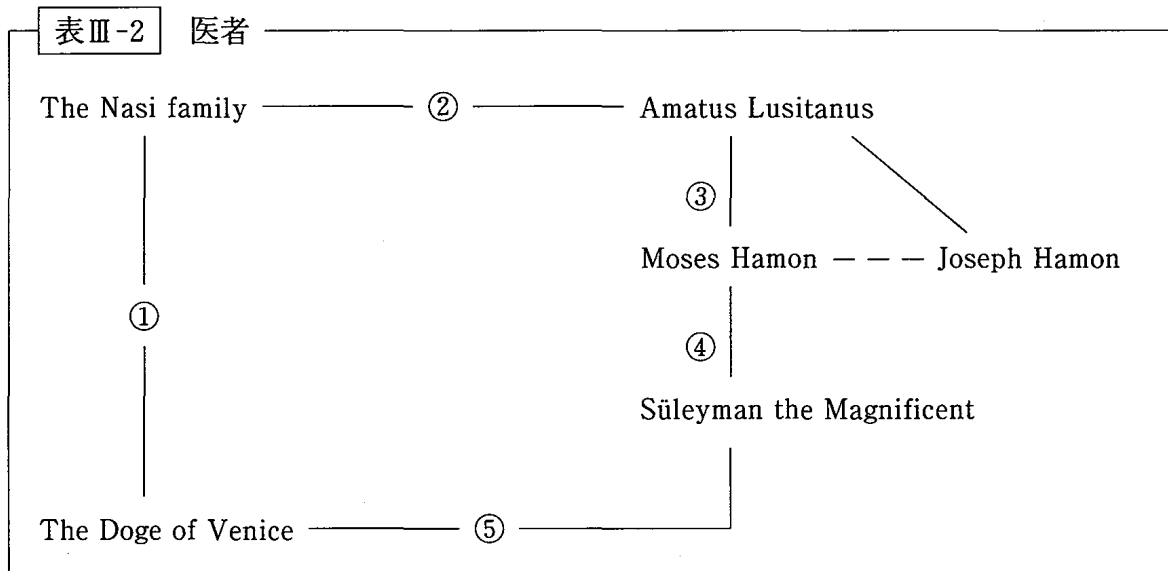
	Amatus Lusitanus (1511-1568)	The Nasi family
1533	Antwerp	
1534		
1535		
1536		
1537		Antwerp
1538		
1539		
1540		
1541	<u>Ferrara</u>	
1542		
1543		
1544		
1545	<u>Ancona</u>	
1546		
1547		Venice
1548		
1549		
1550		
1551		<u>Ferrara</u>
1552		
1553		
1554		Istanbul
1555		
1556		
1557	Pesaro → Ragusa	
1558		
1559	Salonica	

15・16世紀オスマン朝におけるユダヤ教徒宮廷侍医

族はペーザロを主要貿易港に指定することによって、アンコーナ・ボイコットという一種の経済封鎖を企図したが、結局は失敗している。そしてこのペーザロもマラーノたちにとって、決して安住の地ではなかったため、オスマン朝に移住したマラーノも数多く存在し、ルスイタヌスもその一人となっている。この表で注意せねばならないのは、一五三七年から一五四〇年の間、ルスイタヌスとナスイ一族がアントワープに滞在していたことである。さらに、その後フェッラーラにも時期は異なるが、やはり滞在している。また、下線部のアンコーナとペーザロには、

ナスイ一族のエージェントが滞在していたことも明らかである。これはルスイタヌスとナスイ一族が極めて密接な関係を維持していたことを示唆するものである。そして何よりもルスイタヌスは、その著書 *"In Dioscoridis emarrationes"* の中でナスイ一族の当主グラツィアを診察したという記録を残し、さらには *"Centuria"* の第五巻をグラツィアの甥で後の当主になるヨセフ・ナスイに献呈している。<sup>(18)</sup> さらにルスイタヌスとナスイ一族はともに安全な地に至った段階で、ユダヤ教徒に戻ることを宣言している。この両者の関係を考えると、ナスイ一族がルスイタヌスに様々な形で援助の手を差し伸べたとするのが当然であろう。

さて、このようなルスイタヌスとナスイ一族の密接な関係を考慮に入れた上で、イスタンブルのモーゼス・ハモンの存在に再び戻りたい。表Ⅲ-2でその状況を示した。前述のように、ナスイ一族がヴェネツィアの十人会によって財産没収の危機に直面している際に、モーゼス・ハモンに依頼して、スレイマン大帝を動かしてヴェネツィアのドージェに親書を送っている。筆者は、ナスイ一族とモーゼス・ハモンの仲介役にこのアマトウス・ルスイタヌスを選んだ可能性を指摘したい。この表では、



①ヴェネツィアによってナスイ一族が圧力を受けたため、②ナスイ一族はアンコーナにいたルスイタヌスに働きかけて、③イスタンブルにいるモーゼス・ハモンに安全な出国を依頼、④そしてモーゼス・ハモンがスレイマン大帝に連絡が行き、⑤スレイマン大帝からヴェネツィアのドージェに親書が送付されたという経緯も可能

性として考えられる。確かに、ルスイタヌスとモーゼス・ハモンを直接むすびつける一次史料は存在していない。しかしながら、筆者はこの二人の医師の間に、少なくとも書簡を通じての関係が存在していたと考えたい。その根拠としては、以下の三点を挙げる。

### III モーゼス・ハモンとルスイタヌスの関係

まず第一に、モーゼス・ハモンが西ヨーロッパ、イスラーム世界における医学の最新知識を所有していたことである。例えば、モーゼス・ハモンが記し、スレイマン大帝に献上した歯科医術に関する論文では、ルネサンス期を経て当時の最先端を行くヨーロッパの医学と同レベルの水準を維持していた<sup>(19)</sup>。また、故ウリエル・ヘイド教授がモーゼス・ハモンが記したと推定している論文では、ムスリム、ヨーロッパ人、古代ギリシア人、ユダヤ教徒の医師の文献を参照したとしている<sup>(20)</sup>。これらのことを考えると、モーゼス・ハモンが医学に関する古典的研究はもちろんのこと、西ヨーロッパの最新の医学知識を何らかの方法で入手していたと考えるのが妥当であろう。そして、ユダヤ教徒であるモーゼス・ハモンがとりえる最良の手段としては、各地に散在するユダヤ教徒医師やマ

ラーノの医師とコンタクトをとることであったと考えられる。もちろん、この時期、各地のユダヤ教徒の医師やマラーノの医師の中で、最高水準のレベルに立っていたのはアマトウス・ルスイタヌスであった。

第二に、アマトウス・ルスイタヌスは、ローマ時代のキリキア生まれのギリシア人医師ディオスコリデスの研究に関しては、当時のヨーロッパ、イスラーム世界の中で第一人者であったことは周知の事実である。その研究は薬学に関する内容が中心であり、モーゼス・ハモンも薬学について深い知識と経験を有していた。このことは、ドイツの使節であったオギール・ギセリン・ド・ビュスベックが、一五五五年1月から一五六二年8月まで、ほぼオスマン朝に滞在した間に、モーゼス・ハモンの息子のジョセフ・ハモンが遺品として受け継いだ蔵書の中に、ディオスコリデスの写本があり、ビュスベック自身がこれを買収求めようとした記録を残していることから窺える<sup>(21)</sup>。この写本自体は損傷が激しいため、かなりの年代を経たものと考えられるが、少なくともモーゼス・ハモンがディオスコリデスの医学書を読んだことがあると考えるのは当然であり、かつまたその研究の第一人者であるルスイタヌスのことを知っていたとするのも当然であ

ろう。この推論を補うものとして、モーゼス・ハモンの子のジョセフが、一五五九年から一五六〇年にかけて、既にサロニカにいたルスイタヌスに、スレイマン大帝のための解毒剤に関するアドバイスを求めた書簡を送付していた事実をここで述べておきたい。<sup>(22)</sup>

最後の根拠として、ナスイ一族がモーゼス・ハモンとルスイタヌスの仲介役の位置に立っていた可能性を挙げなければならぬ。表Ⅲ―1で説明したように、ナスイ一族とルスイタヌスは数多くの接触のチャンスを持っていた。ナスイ一族がヴェネツィアを離れる直前に起こったグラツィア姉妹の財産相続を巡っての問題で出されたレスポンサでは、グラツィアがトルコに住み、ユダヤ教徒であることを宣言すれば、亡夫の遺産の相続が可能になることを述べている。この段階では、グラツィアは既にオスマン朝に移住すること、そしてユダヤ教信仰に戻ることこそが、グラツィアにとって一族の財産、ひいては一族の存在自体を守るために必要な行動であったのである。実際、ヴェネツィアを去って、フェツラーラに着すると彼女はユダヤ教徒であることを宣言、そしてその3年後にはイスタンブルに移住している。ナスイ一族がヴェネツィアを去る段階で、既にオスマン朝に定住す

ることを決めていたとするならば、イスタンブルのユダヤ教徒コミュニティの有力者であるモーゼス・ハモンに何としてでも、連絡を取らねばならなかったはずである。仮に、ナスイ一族が維持していたと考えられるエージェントやラビのルートが機能していなかったとしたら、医師のルートを利用することも考えたはずである。そのとき、ルスイタヌスはナスイ一族のエージェントも常駐していたアンコーナにおいて、連絡を取ることが容易であった。一方、ルスイタヌスとモーゼス・ハモンはこの時点でお互いの存在を知っていたと考えられ、ナスイ一族がその仲介役として、二人の医師の関係を設定することも可能であったはずである。これら三つの根拠を基に、モーゼス・ハモンとルスイタヌスがお互いの存在を知り、何らかの関係を維持していたと考えるならば、ユダヤ教徒の医師とマラーノの医師のネットワークをナスイ一族は容易に利用できたと考えられる。

以上述べてきたように、ナスイ一族は三つのルート、すなわちエージェント、ラビ、そして医師を介して広範で有機的な情報ネットワークを維持していたと考えられる。もちろんこれらを単独で利用するよりも、恒常的かつ複合的に利用してきたのが実体であろうと思われる。

一つのルートによって得られる情報が少なかったり、信頼性の低かったりした場合には、他の二つのルートによって補完させるということが、恒常的に行われていたはずである。それは、ナスィ一族だけでなく各地に散らばるラビや医師たちにとっても有益な情報であり得るからである。

#### IV 結びに代えて

これらユダヤ教徒やマラーノの医師たちのネットワークは、単にナスィ一族が利用しただけに止まるものではない。ルスイタヌスは教皇に呼ばれ何度かローマに赴いている。また、彼は前述のような居住した諸都市の他にも、フィレンツェも訪れている。もちろん、それは彼の医師としての知識や技能が優れているからに他ならない。ルスイタヌスの数多くの医療行為や研究活動から考えると、彼の関心は医学が中心であったことは明白である。しかし、様々な地域や国家、それも権力の中枢にあるような人々との接触は、彼にその地域や国家の状況を知るチャンスを与えていたことを意味する。それも宮廷内の情報、すなわち第一級の政治情報である。本稿ではルスイタヌスとモーゼス・ハモンの二人の医師に限定した

が、その他の国々にも多くのユダヤ教徒の著名な医師が活躍している。彼らすべてに情報ネットワークが存在していたとは考えている訳ではない。しかし、各国の宮廷を含む様々な場面で医者として活動していくためには、最新の医学知識や技能を必要としていたのは当然であろう。そのための情報の獲得はユダヤ系の医師を否応なく政治の世界に巻き込むことも少なからず起こっている。モーゼス・ハモン、そしてナスィ一族は医師を含む様々な情報ネットワークを複合的に活用し、イスラーム世界のズインミーとして巨大な権力を獲得した特殊な存在であったと言っても過言ではないだろう。

しかしながら、これらのユダヤ教徒医師らの活動は、基本的には個々人の能力に負っているものがほとんどである。さらに、常に権力者の庇護下にあつてこそその活動であるため、その国家内の権力争いに巻き込まれたり、あるいは彼らのパトロンが権力の中枢からはずれるようなことになる、そのユダヤ系医師や商人たちも同時に没落することになる。オスマン朝のナスィ一族やモーゼス・ハモンはまさにその例である。この点が彼らユダヤ教徒社会の大きな弱点であったと言える。

また、ユダヤ教徒追放令よって、イベリア半島を追わ

れたスファルディームやマラーノは16世紀までは、迫害を受けたことよって一時的に連带的な行動を見せたこともあった。しかし、時の経過と共にスファルディームであることよりも、各国宮廷の臣民という意識の方が強くなり、かつて存在していた情報ネットワークも衰退の方向へ進んでいったと考えられる。これらの問題については、稿を改めて考察したい。

## 註

- (1) ナスィー族の情報ネットワークについては次を参照。  
拙稿「16世紀オスマン朝におけるユダヤ教徒と情報ネットワーク」『研究紀要(普連士学園)』第一号、一九九四年、33頁～53頁。
- (2) P. Grunebaum-Ballin, *Joseph Naci duc de Naxos*, Paris, 1968, pp. 27-65.
- (3) U. Heyd, "Moses Hamon, chief Jewish Physician to Süleyman the Magnificent," *Oriens*, XVI (1963), p.159.  
モーゼス・ハモンは本来「ブライ語」で「モシエ・ハモン」とすべきであるが、本稿では一般的な呼称である「モーゼス」を使用する。
- (4) S. Marcus, "Hamon," in *Encyclopaedia Judaica* (全12巻)『EJ』と略す。VII, Jerusalem, 1972, p.1247f.; U. Heyd, *op. cit.*, pp. 155-159.
- (5) I. H. Uzuncarsli, *Osmanlı Tarihi*, II cilt, TTK, Ankara, 1983, pp.145, 150, 618; F. Babinger, *Mehmed the Conqueror and His Time*, tr. R. Manheim, Princeton U.P., 1978, pp.378-380.
- (6) B. Lewis, "The Privilege Granted by Mehmed II to His Physician," *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, XIV-3, pp.550-563; A. Galante, *Histoire des Juifs de Turquie*, Tome I, Istanbul, rep., 1985, pp.105-109.
- (7) U. Heyd, *op. cit.*, p.157f.; A. Galante, *op. cit.*, Tome IX, pp.85-87.
- (8) U. Heyd, *op. cit.*, pp.152-170.
- (9) A. Shmuelewitz, *The Jews of the Ottoman Empire in the Late Fifteenth and Sixteenth Centuries*, Leiden, 1984, pp.20-23.
- (10) *Ibid.*, p.24f.; A. Levy, *The Sephardim in the Ottoman Empire*, New Jersey, 1992, p.50f.; L. Bornstein-Makovetsky, "Jewish Lay Leadership and the Ottoman Authorities during the Sixteenth and Seventeenth Centuries," in A. Rodrigue ed., *Ottoman and Turkish Jewry*, p.94f.; M.A. Epstein, *The Jewish Communities and Their Role in the Fifteenth and Sixteenth Centuries*, Freiburg, 1980, pp.62-68.
- (11) U. Heyd, *op. cit.*, p.161; S.W. Baron, *A Social and Religious History of the Jews*, vol. XVIII, New York, 1983, p.76; H.Gross, "La Famille Juives des Hamon," *Revue des Études Juives*, tome 56, 1908, p.17f.
- (12) 拙稿「16世紀地中海世界におけるマラーノの足跡——マナ・グラント・ナスィー」『地中海学研究』XX, 20頁

75頁。拙稿「ヨセフ・ナスイ——オスマン朝における元マラーノの軌跡」『オリエント』第39巻第一号、159頁〜162頁。拙稿「16世紀オスマン朝におけるユダヤ教徒と情報ネットワーク」、33頁〜53頁。

(13) レスポンサについては、次を参照。拙稿「15・16世紀オスマン帝国史研究におけるヘブライ語史料の重要性」『日本中東学会年報』第4号、175頁〜199頁。

(14) 拙稿「ドナ・グラツィア・ナスイ」、66頁〜67頁。

(15) M.S. Goodblatt, *Jewish Life in Turkey in the XVIIth Century As Reflected in the Legal Writings of Samuel de Medina*. New York, 1952, pp.332-390.

(16) J.O. Leibowitz, "Amatus Lusitanus," *EJ*, II, pp.795-798; H. Friedenwald, *The Jews and Medicine, Essays*, vol.1, New York, 1967, pp.332-390.

(17) アンコーナ事件及びアンコーナ・ボイコットについては、次を参照。拙稿「16世紀地中海世界におけるユダヤ教徒間の相剋——アンコーナ・ボイコット事件とナスイ一族」『研究紀要(普連士学園)』第2号、41頁〜65頁。

(18) H. Friedenwald, *op.cit.*, p.390.

(19) U. Heyd, *op.cit.*, p.169.

(20) *loc.cit.*

(21) O.G. de Busbecq, *The Turkish Letters of Ogier Gueselin de Busbecq*, tr. E.S. Forster, 1968, p.243.

(22) U. Heyd, *op.cit.*, p.170.

#### 〔附記〕

本稿は、一九九九年五月東京経済大学において開催された第

三回アジア中東学会 (AFMA) 大会 (日本中東学会第15回年次大会) で発表した "Jewish Court Physicians in the 15th and 16th Centuries Ottoman Empire" を修正、加筆したものである。また、本稿をもとにヨーロッパの政治情勢とユダヤ教徒との関連、オスマン朝のズインミー政策を中心とする諸政策を加筆した拙論を次に発表したもので、参照されたい。拙稿「ユダヤ教徒ネットワークとオスマン朝」『岩波講座 世界歴史 第14巻 イスラーム・環インド洋世界』岩波書店、二〇〇〇年。